

原著 (Article)

## 歌唱活動に対する保育者の意識と言葉掛け

Analysis of the utterance intention of nursery teachers in singing activities

小杉 裕子\*・加藤 道子\*\*・杉江 栄子\*\*\*・鈴木 文代\*\*\*\*  
KOSUGI, Hiroko\* KATO, Michiko\*\* SUGIE, Eiko\*\*\* SUZUKI, Fumiyo\*\*\*\*

### 要 旨

歌唱活動に関する保育者へのアンケート調査から、保育経験の長い保育者よりも、若い保育者の方が「笑顔」や「身振りしぐさが出る」など子どものダイレクトな表しに楽しさを捉える傾向のあることがわかった。そして子どもを「褒める」「子どもと同じようにふるまう」などの、受容・共同的なかかわりで支え、子どもに響き合う存在になろうとする傾向が、若い保育者の方に強くみられた。また、歌唱活動を保育者の言葉掛けに着目して事例を検討したところ、定型化した言葉掛けに終始したり、子どもに問いかけることに止まったりすることがわかった。全体歌唱であるからこそ、子ども同士の心をつなぎ「感じ方の交流」を楽しむための言葉掛けを意識することが大切だと考えた。

キーワード：幼児、歌唱活動、言葉掛け

Key words : child, singing activity, utterance intention

### はじめに

保育の現場で、歌唱指導や歌を歌うことは日常的に行われている。歌唱を「やってみたい」活動「楽しい」活動にするためには保育者の意識と言葉掛けを考える必要があり、それは子どもたちが意欲的に学ぶことに結びつくように思われる。

「楽しい」とは、気持ちよく明るい気分、のびのびと満ち足りた気持ち、快い、心が弾む、豊かである<sup>1)</sup>、などを表す言葉である。クラスみんなで歌を歌うとき、保育者は、子どもたちにどのように快く感じ、豊かであってほしいと願うのだろうか。保育者が考える「歌う楽しさ」とは何なのだろうか。本稿ではまず、子どもが楽しく歌っていると感じるのはどんな時か、そして、保育者は子どもたちが楽しむ様子をどのように受け止めようとしているのかを、まず整理したい。

その上で、歌唱活動における保育者の指導のあり方について考えたい。歌唱活動を「楽しく歌えればそれでよい」とする声もある。あえて指導はしない、深くは考えな

\* 椋山女学園大学教育学部, \*\* 至学館大学附属幼稚園, \*\*\* 高浜市こども発達センター, \*\*\*\* 岡崎女子短期大学

い、という消極的意味合いにも受け取れてしまう。だがそこには、歌唱に対する保育者の指導はむしろ子どもの自由な表現を妨げてしまうのではないかという危惧が垣間見える。つまり指導と子どもの主体性のバランスに悩んだとき、「それでいい」という言葉を落としどころにしてしまうのではないだろうか。指導と主体性の両立をどのように考えたらよいのか。

子どもの豊かな表現は、その子の生活全体の体験を豊かにすることによって育まれる。例えば、歌の内容を味わうことで子どもの体験を豊かにし、声の出し方を考えることにより、その子らしい感じ方や表現の仕方を引き出す指導は、子どもの自由な表現を妨げることにはならないだろう。むしろ一步踏み込んで、歌唱活動をどのような体験の場にするのかを明確にすることで、感じて歌う楽しさ、声に思いを込める楽しさを育てることができるよう思う。

保育者は、言葉を掛けたり、ピアノ伴奏をしたり、時にはその動作で、歌唱活動を支えていく。中でも「言葉掛け」は、具体的かつ直接的な指導ができるという意味で、重要だといえよう。その保育者の言葉掛けについて、鈴木らは、保育者は「子どもの内面の理解を重視しながらかわろう」としているにもかかわらず、それを具体化する子どもへの言葉掛けはステレオタイプ化していると指摘する。さらに、保育者自身が指導を受けたい内容は「子どもへの言葉掛け」であったことから、自ら気づき状況判断して行動できる子どもを育てる言葉の掛け方についての探究・工夫が望まれる、と述べている<sup>2)</sup>。

おそらく歌唱活動における指導も、同様の問題を抱えていることが推察される。そこで、子ども自らの気づきを引き出し、感じて歌う楽しさ、声に思いを込める楽しさを味わう歌唱活動をめざした言葉掛けについて考察することを、本稿の2つ目の課題とする。

## 1. 歌唱活動に対する保育者の意識

### (1) 方法

保育者へのアンケート調査を採用した。調査対象園は、愛知県N市およびその近郊の保育所と幼稚園から無作為に抽出した後、調査への了承を得た26園である。質問紙は、2007年5月～8月の期間で、26園160名に、園へ直接あるいは郵送で配布し、記入後はその場で、もしくは後日郵送等で回収した。調査項目はクラスみんなで歌う活動の頻度、選曲、子どもに経験してほしいこと、伴奏の仕方など15項目である。質問紙には、本調査の歌唱活動の中には手遊びを含めないことを明記した。また、クラスみんなで歌う活動は、2歳児以下のクラスで行われることは少ないと考え、調査対象は3歳児以上児を受け持つ保育者に絞った。さらに、3歳、4歳、5歳の各年齢における指導の傾向を明らかにするために、現在受け持っているクラスについて回答してもらうことも質問紙に明記して、調査を行った。

## (2) 結果と考察

その結果、132 名から回答を得た（回収率82.5%）。回収結果および記述者の属性は、次の通りである。

表 1. 回収結果および記述者の属性

種別	保育所16園(公立11, 私立5)	幼稚園8園(公立2, 私立6)
保育者数	73名(55.3%)	59名(44.7%)
性別	男性:3名(2.3%) 女性129名(97.7%)	
保育者の年齢	20代:82名(62.1%) 30代:31名(23.5%) 40代:12名(9.0%) 50代:7名(5.3%)	
受け持ちクラス	年少:51名(38.6%) 年中:39名(29.6%) 年長:41名(31.0%) 無回答:1名(0.8%)	

### 1) 楽しさの指標

クラスでの全体歌唱において、「子どもたちが楽しく歌っていると感じる時はどんなときか」を尋ね、表2に示したような「その他」を含む10の選択肢の中から、該当するものを3つまで選んで回答するよう求めた。この設問の有効回答者数は131名であった。

選択肢の回答結果を幼児の学年別に示したのが表2である。全体としては「笑顔がみられる時」が最も多く選択された。年少児を担当する保育者の回答は上位3項目に集中し、中でも「体の揺れやしぐさ」を、楽しさの表現として評価する傾向があった。年中児担当では、「声がよく出ている時」と「歌に全員が参加している時」が、他学齢より多く選択されている。年長児担当は「意欲的に歌っている時」、「声がよく出ている時」、「自信を持って歌っている時」に回答が分かれた。このことから、楽しさの指標は学齢が上がるにつれ、体の揺れや身振り・しぐさなどの個人的な自然な表しから、友達と一緒に活動する楽しさへ、そして歌う姿へと、変化していく傾向がうかがえる。

なお、「その他」の回答には〈声に勢いがある時〉〈歌の時間以外で子どもたちだけで口ずさんでいる時〉などが記述された。

表 2. 子どもたちが楽しく歌っていると感じる時

	年少 (51名)	年中 (39名)	年長 (41名)	全体 (131名)
笑顔がみられる時	35(69%)	24(62%)	26(63%)	85(65%)
体をゆらしたり、身振りやしぐさが出ている時	30(59%)	20(51%)	17(41%)	67(51%)
「もっと歌いたい」という声が聞こえた時	18(35%)	19(49%)	18(44%)	55(42%)
歌を覚えて自信を持って歌っている時	9(18%)	9(23%)	10(24%)	28(21%)
声がよく出ている時	6(12%)	13(33%)	8(20%)	27(21%)
一人一人が意欲的に歌っている時	7(14%)	7(18%)	9(22%)	23(18%)
子どもから歌についての話が出てきた時	3(6%)	4(10%)	4(10%)	11(8%)
歌うことに全員が参加している時	2(3%)	5(13%)	2(5%)	9(7%)
声がそろってきた時	3(6%)	1(3%)	1(2%)	5(4%)
その他	3(6%)	3(8%)	2(5%)	8(6%)
合計	116	105	97	318

表3. 「子どもたちが楽しく歌っていると感じる時」の保育者の年齢別比較

カテゴリー	項目	20代	30代	40代以上	合計
自然な表し	笑顔がみられる時、 体をゆらしたり身振りやしぐさが出ている時	98 52.7%	37 46.2%	18 37.5%	153
意欲・態度	「もっと歌いたい」という声が聞こえた時、 子どもから歌についての話が出てきた時、一 人一人が意欲的に歌っている時、歌うことに 全員が参加している時、歌を覚えて自信を 持って歌っている時	73 39.2%	35 43.8%	19 39.6%	127
歌声	声がよく出ている時、声がそろってきた時	15 8.0%	8 10%	11 22.9%	34
合計		186	80	48	314

次に、表2にある「その他」を除いた選択肢9項目を、表3に示したような3つのカテゴリーに分けて、①学齢別、②保育者の年齢別、③幼稚園・保育所の別、④公立・私立の別、で検定を行ったところ、②保育者の年齢別による比較において、有意差が認められた ( $\chi^2=10.073$ ,  $df=4$ ,  $p<0.05$ )。

カテゴリーが3変数あるので、どのカテゴリー間で違いがみられるのかを把握するために残差分析を行った。その結果、若い保育者の方が、表情や身体の揺れなどのダイレクトな表しに楽しさを捉える傾向があった(表4)。

表4. 残差分析の結果

カテゴリー	20代	30代	40代以上
自然な表し	1.7	-0.5	-1.9
意欲・態度	-0.5	0.7	-0.3
歌声	-1.7	-0.1	2.9

## 2) 子どもの受け止め方

保育者は、楽しく歌っている子どもをどのように受け止めようとしているのかを把握したいと思い、「楽しく歌っている子どもを受け止める際、どのようなことに心掛けているか」を尋ね、自由記述により回答を求めた。この設問に対する有効回答者数は109名であった。記述の具体例は〈保育者の表情から楽しさを感じ取ってもらえるよう笑顔で歌う〉〈保育者も楽しいと感じていることを表情や言葉で表し、くり返し歌う〉というようなものである。これらの回答から、共通する記述内容を抽出して分類した。その結果が表5である。一人の回答が複数の内容を含んでいる場合には分割して分類を行ったため、回答総数は回答者数を上回っている。

全体としては、子どもへの共感に重点をおく「受容・共感的なかわり方」が多くみられた。例えば〈1保育者も一緒に歌う〉〈2一緒に楽しむ〉といったようなものである(数字は表5の項目の番号である)。一方、子どもを導いていくことに重点をおく〈3その時々でよかったところや表現したことを褒めたり言葉にして、その部分がより伸びていくようにする〉〈13声が出ている子、表情のいい子をみんなに紹介し、他児にも意識させる〉などの「指導的なかわり方」は少ないようにみえる。しかしながら、子どもの受け止め方は、保育経験によって変化していくのではないだろうか。そこで、保育者の年齢との関連があるかどうかを検討したいと考えた。40代以

表5. 子どもの様子をどのように受け止めるか

1	保育者も歌う	33(30%)
2	子どもと同じようにふるまう	31(28%)
3	評価・感想を伝える	28(26%)
4	褒める・認める	27(25%)
5	保育者も楽しむ	23(21%)
6	リクエストに応える, 子どもの気持ちに応える	21(19%)
7	共感する	18(17%)
8	保育者の笑顔	12(11%)
9	何度も歌う	11(10%)
10	保育者も動く	9(8%)
11	次の楽しさへつなげる	9(8%)
12	子どもと目を合わせる	5(5%)
13	よい姿を他児に伝える	5(5%)

表6. 「子どもの様子をどのように受け止めるか」の保育者の年齢別比較

カテゴリー	項目	20代	30代以上	合計
受容・共同的	褒める・認める, 共感する 保育者も歌う, 子どもと同じようにふるまう, 保育者の笑顔 保育者も楽しむ, 保育者も動く, 子どもと目を合わせる	124 81.6%	55 68.8%	179
指導的	評価・感想を伝える, リクエストや子どもの気持ちに応える, 何度も歌う, 次の楽しさへつなげる, よい姿を他児に伝える	28 18.4%	25 31.3%	53
合計		152	80	232

上の保育者からの回答総数が29と少なかったことから、若手の保育者（20代）と中堅層以上（30代以降）の保育者とに分けて検定を行った。その結果を表6に示した。保育者の年齢別による比較において有意差が認められた（ $\chi^2=5.358$ ,  $df=1$ ,  $p<0.05$ ）。指導的なのかかわりは、保育経験の長い保育者の方に多くみられた。若い保育者の方が、子どもの自然な表しを受容・共同的なのかかわりで支えている傾向が強いといえよう。

若い保育者は、「楽しい活動」を思い描くと、子どもを導くことがためられるのかもしれない。もちろん、受容・共同的なのかかわりは指導にならない、と言っているのではない。〈1・2・10一緒に体をゆらしたり、目線を合わせたりして歌う。〉などの共同的なのかかわりをとおして、表現者としての良きモデルとなり、技能と心情の両面から子どもたちに影響を与えることができるだろう。また、〈7子どもたちと一緒に楽しむ〉ことにより、子どもが安定と安心感をもって活動に参加するように支えることもできよう。このような、子どもと響き合おうとするスタンスは、若い保育者の方に強いことが推測される。

言葉の掛け方について、〈3ただ「上手」の一言で終わらせないように心がける。〉

や、その他に分類された〈あえて声をかけない。声をかけすぎると、子どもの世界がこわれてしまう。余韻も大切。〉などの記述があった。言語化に頼りすぎたり、保育者の思いを一方的に伝えたりすることへの戒めとも受け止められる。子どもに応答しながら、言葉を選んで指導することの重要性を示唆するものといえるだろう。

## 2. 言葉掛けの検討

前述のアンケート調査結果にあるように、約3割の保育者は子どもに評価・感想を伝えていた。子どもたちには、おそらく受容・共感を表す言葉も掛けるだろうし、歌詞の内容を味わったり、子どもの意見を聞いたりすることもあるだろう。では、実際にはどのような言葉掛けがされているのだろうか。ここでは、子ども自らの気づきを引き出し、感じて歌う楽しさ、声に思いを込める楽しさを味わう歌唱活動をめざした言葉掛けのあり方を、第1筆者と共同研究者3名が観察し記録した事例に基づいて検討したい。

### 事例1. 年少12月

クラス全員	指定された机の位置に、椅子に座っている。
保育者1:	みなさん、立ちましょう
クラス全員:	椅子から立ち上がり、椅子を机の中にしまう
保育者1:	手は後ろ、背中はピン（と言って保育者も姿勢を正して見せる）
クラス全員:	保育者を真似て、手を後ろで組み、背中を伸ばす。
保育者1:	「サンタクロース」のうたを歌いましょう
保育者2:	ピアノを弾きだす
クラス全員:	♪あかいぼうし　しろいおひげ…… 両手を後ろで組んだまま、直立不動で歌を歌い終わる。
保育者1:	はい、座りましょう（今日の予定を説明し始める）

### 事例2. 年中11月

保育者:	今から歌を歌うよ
子ども:	何の歌?
保育者:	どんぐりころころだよ、元気に歌ってね（オルガンを弾き出す）
	♪どんぐりころころ……
保育者:	元気に歌えたね

### 事例3. 年長5月

保育者:	お歌の用意!
子ども:	はい!（返事をして姿勢を正す）
保育者:	（前奏を弾きながら）さあ歌うよ～
	♪歌う……
保育者:	上手! 次は何かな?（言いながら次の曲の前奏を弾く）

事例1～3の保育者に共通しているのは、歌唱活動を進めるための言葉掛け、つまり歌う前の言葉掛けと、活動をしめくくる言葉掛けに終始していることである。学齢を問わず言葉掛けが定型化しており、淡々と進められる印象を持つ。

事例1の“サンタクロースのうた”には、手遊びや手拍子があるが、保育者は知っているのか知らないのか、取り入れてはいなかった。観察者の目には、子どもたちははりきって歌っているものの、無表情で保育者の指示にひたすら従っているように映り、全体の姿勢、歌声はそろっていたが、子どもたちは楽しんで歌ってはいないよう見えた。年少児はクラスで歌声をそろえるよりも、サンタのイメージを大切にしながら、楽しんで一人一人の表現が出るような、心情を育てる言葉掛けがほしいと思われた。また、体が思わず動いてしまう、それぞれのテンポの取り方で、友達同士で顔を見合わせ笑い合えるような雰囲気してほしいようにも思われた。

事例2,3の保育者は、歌唱後に「元気」「上手」という感想を伝えてはいるが、どこが元気だったのか、何が上手だったのか、子どもたちには伝わっているのだろうか。よく使われるこれらの言葉は、雰囲気では伝わるかもしれないが、実は子どもにとって実感を伴わない言葉になっているように思う。

#### 事例4. 年中9月

「パレード」を歌い終わったところで

保育者： 今みんなはパレードの歌を歌ったんだけど、パレードって何だろう？

子1： 楽器をいっぱい持って演奏する

子2： たいこのパレード見た

子3： ディズニーランドで見た

保育者： そういうパレードって立ってるだけ？

子4： 歩いてた

保育者： どんな風だったか前に来て見せてくれる？

子4： ラップを持つ真似をして歩く

保育者： そういう時ってどんな顔をしてやってた？

子ども： 楽しい

保育者： 楽しい時の顔は？どんな顔してる？

子ども： うれしい顔～ にこにこ顔～ 笑ってる顔～

保育者： みんなはどんな気持ちで歌うかな？

#### 事例5. 年長6月

「にじ」の1番を歌い終わったところで

保育者： ……ってところで、自然にだんだん声が大きくなっていったよね

子A： Bちゃん、泣きそうだったよ

子B： ううん（首を横に振る）

保育者： 泣きそうだった人！（と言いながら手を挙げる）

子ども： 数名が手を挙げる（A子も挙手）



保育者： 先生もピアノ弾いてて涙が出そうになることあるよ、みんなの声がきれいで。  
虹が出るとどんな気持ちになれるかな？ 虹ってどんな色？  
子ども： 口ぐちに発言する  
保育者： 先生の楽譜には「やさしい気持ちで」って書いてあるよ。  
子ども： 「……」（言葉が出ない）  
保育者： 「あー、虹が見れてよかったなあ」と思うと、そんな気持ちになれるかな。  
立つといい声が出るよ、おせなピン、手は横に。

事例4、5の保育者は、盛んに子どもに問いかけている。事例4では、パレードについて見聞きしたことのある子の個人的経験を、クラスみんなの共通経験に拡大する役割を担っている。そこから、どんな気持ちで歌ったら楽しいか他児にも想像がふくらむよう問いかけているものと思われる。

事例5では、曲想に合わせて自然に歌声にも膨らみが生まれていたことや、歌いながら気持ちが高ぶってきた友達の様子などを、具体的にフィードバックしている。さらに、虹を見たことがあるかを問いかけたり、作曲家の表記した「やさしい気持ちで」という表現記号を紹介したりして、歌詞の内容の理解をはかろうとしている。

しかし両事例とも、先生の問いに子どもが答えるという、保育者対子どものやりとりにとどまっている印象を持つ。また、歌詞の内容理解に迫るも、実際にどんなことを心に思い描いて歌ったら「楽しく」あるいは「やさしい気持ちで」歌えるのかを具体的に援助する言葉掛けに乏しいといえる。

#### 事例6．年長2月

保育者： 目を閉じましょう。  
先生目の前には青い空が広がっています。  
みんな目の前にはどうですか？ 青い空が広がっていますか？  
子ども： 目を閉じて保育者の言葉を聞く（頷いている子もいるが、言葉での反応はない）  
保育者： 目を開けましょう。先生の前にはまだ青い空が広がっていますよ。  
青い空が目に見えるような、そんな気持ちで歌いましょう

事例6の保育者は問いかけるだけである。子どもたちの言葉による反応はない。しかし、保育者は何が見えたのかは問わず、まずは子どもたちの個々がイメージする姿を丁寧に受け止めている。さらに、「先生の前にはまだ青い空が広がっている」と問いかけて、子ども一人ひとりのイメージをつないでいる。思い描く情景を具体的に提示することで、「同じ空を見ているつもり」を楽しみ、イメージを共有して歌う気持ちが持ちやすくなっているといえる。発話数は少ないが、子どもの心が響きあうような、応答的な対応がされている。



## 事例 7. 年長11月

保育者： みんなの大好きな歌を歌うよ。  
 子ども： 分かった。ズート君と一緒にしょ<sup>3)</sup>。  
 保育者： やっぱりそうだったんだね。先生もそんな気がしていたんだ。  
 子1： 先生、丸くなって歌った方がいいんじゃないかな  
 保育者： どうしてかな  
 子1： だってみんなの顔が見れるから  
 保育者： 顔を見て歌いたいんだね  
 子1： だって、みんな、仲間って感じがするもん  
 保育者： 他の子はどうか？ みんな仲間って感じがするAちゃんの考えは？  
 子2： いいね。Aちゃんの顔を見て歌おう

事例7の保育者は、子どもの思いを受け入れ、支援している。まず、「大好きな歌」の選択権を子どもに与え、「そんな気がしていたんだ」と受け入れている。次に、Aの「友達を意識したい」という思いを受け入れ、それを友達に伝えるとともに、みんなで心地よさを感じ取れるように支援している。このやりとりの後、子どもたちは円陣になって歌いだした。顔を見合わせ笑顔になったり、意識して視線を送り相手の視線を待ったりする様子が見られた。子どもの気づきを引き出すとともに、「自分が味わっている楽しさを、友達も同じように味わっている心地よさ」をクラス全体で体験することができていたと思われる。

## 事例 8. 年長1月

保育者： 今日は“ともだちのと”を歌います。どんな気持ちで歌いたい？  
 子1： 友達のことを思って歌う  
 子2： 楽しい気持ち  
 保育者： 友達と一緒に遊んだことを思い出して歌ってね  
 ……歌い終わって……  
 保育者： 歌ってどんな気持ちになった？  
 子3： いい気持ち  
 子4： 楽しい気持ち  
 保育者： 友達のことを思い出していたんだね。上手に歌えるようになってきたから、隣の友達の声を聞きながら歌おうね

事例8では、歌う前には子どもの歌に対するイメージを尋ね、まず保育者自身が子どもの感じていることを確かめるとともに、その意見をクラス全体に共有させている。また、子どもの歌った後には、保育者が感想を伝えるのではなく、子どもの感想を引き出して受け止めている。発話数は事例2、3とほぼ同じだが、子どもの感じたことを受容し共感しようとする姿勢が感じられる。

この事例の保育者は、「どんな気持ちで歌いたい？」と尋ねた理由を、「歌詞を暗記したら、歌い急ぐようになった気がしたので」と述べていた。そこで、「自分一人で歌う楽しさより、今はクラスみんなと一緒に歌う楽しさを意識してほしい」と

め、〈隣の友達の声聞きながら歌おうね〉と言葉を掛けたという。またこの保育者は、「年長児クラスでは、気持ちを込めて歌う、歌詞の内容をイメージして歌う、聞いている人に気持ちが伝わるように歌う、などを子どもたちに伝えていきたい」と考えているという。

保育者は、子どもたちに、その歌をとおして伝えたいこと、感じ取ってほしいと願うことなど、意図をもって言葉を掛けていきたい。しかし、歌い方、感じ方は保育者が決めるものではない。子どもの気持ちをていねいに受け止めつつ、どんな刺激を与えたらよいのかを考えることが大切になってくる。事例6・7・8のように、自分の気持ちと仲間の気持ちが重なること、すなわち仲間意識を味わわせることも、感性や共感性を養うとともに、いい声を引き出すための刺激の一つになると考えられる。

### 3. 総合考察

アンケート調査の結果から、保育者は子どもたちの様子から歌うことをどのように受け止めようとしているのかについてみると、若い保育者の方が「笑顔」や「身振りしぐさが出る」など子どものダイレクトな表しに楽しさを捉える傾向があった。そしてその姿を「褒める」「子どもと同じようにふるまう」などの、受容・共同的なかかわりで子どもたちを支え、子どもに響き合う存在になろうとする傾向がみられた。このような指導観は、保育経験の長い保育者よりも、若い保育者の方に多くみられた。

次に、保育者の歌唱活動における望ましい言葉掛けについて事例から検討した。定型化した言葉掛けで坦々と進めることを回避するためにも、子どもの歌声に対する評価・感想は、より具体的であることが望ましいと考えられた。その際、保育者自身の感想を伝える前に、子どもの感想を尋ねることがあってもよいと思われる。今、子どもが気づいていることや、感じていることを確かめることは、子どもがまだ気づいていないこと、つまり指導のポイントの見極めにつながるだろう。その上で、クラス全体で「感じ方の交流」を楽しむための言葉を子どもに掛けていくことが大切だと考えられる。

感じ方の交流は、子どもの側からその子らしい感じ方や表現の仕方を引き出すことから始まる。そう思うと、つい「これはどうだった?」「これは知っていますか?」と次々と問いかけてしまう。やはり、子どもの言葉をじっくりと待ったり、時には、子どもが感じている時間を、静かに黙って共有したりすることが必要ではないだろうか。事例の保育者は、子どもに「どうしてかな?」と問いかけたら、「〇〇ということなんだね」と受け止め、「〇〇という意見はどうですか?」と、友達の気持ちをクラスで共有することを楽しんでいた。つまり、保育者は、歌っている子ども一人ひとりの思いをキャッチするための、子どもと保育者をつなぐ直線的な言葉掛けに加え、全体歌唱であるからこそ、子ども同士の心をつなぐための複線的な言葉掛けが大切である。それにより、子どもたちのさらなる新たな気づきを引き出していきたい。

## おわりに

保育者の言葉掛け一つで、子どもの中に育つものが違ってくると思われる。歌唱指導においてはその一言に対する意識が薄れがちになり、歌えばよい、と歌唱の時間を流してしまったり、マンネリ化した言葉掛けになったりしないようにしたい。また、コミュニケーションを取ることが難しい子ども、大人が多くなっている今だからこそ、改めて、自分らしく表現することの心地よさを、相手に自分の表現を発信しても大丈夫という安心感の中で育てていきたいものである。

そのためにはおそらく、保育者自身の感じる力と、歌唱指導における保育的な価値認識を高めることが必要なのではないだろうか。保育者自身の幅広い感動体験が、言葉の選び方に影響を与えているかもしれない。また、職場内でのFD活動や園外研修によっても、子どもへの言葉掛けが変わってくるだろう。これらのことを今後の課題としたい。

## 謝 辞

アンケート調査にご協力くださいました保育者の方々、調査実施にご協力くださいました各園の園長先生、市役所保育課の職員の方々、また、保育を参観させていただいた先生方に、心より感謝申し上げます。

### ■注

- 1) 岩波国語辞典第6版 岩波書店 2000  
広辞苑第6版 岩波書店 2008
- 2) 鈴木文代ら「保育実践力の育成・向上に関する研究—子どもへの言葉掛けの検討—」『日本保育学会第64回大会発表要旨集』p. 686 2011
- 3) この曲名は観察者の聞き取りによるものである。

### ■文献

- 今川恭子「子どもの「うたう」活動を支える保育者の視点—「音楽的な」思考パラダイムの再検討—」『保育の実践と研究』Vol. 5 No. 4 p. 49～62 2001
- 小杉裕子「みんなで歌う場面での表現する楽しさのある環境づくり」『日本保育学会第61回大会発表論文集』449 2008
- 小杉裕子「一斉歌唱場面における保育者の指導を考える—豊かな表現活動をめざして—」『椋山女学園大学研究論集』第40号（人文科学篇）p. 65～74 2009
- 小杉裕子、加藤道子ら「保育実践力の育成・向上に関する研究(5)—歌唱場面での言葉掛け—」『日本保育学会第67回大会要旨集』p. 877 2014